世界の民話6 ドイツ編

赤ひげとぶどう酒商人ほか

小川一枝　絵：佐藤忠良

日文 701675977

民話6 ドイツ編

赤ひげとぶどう酒商人ほか

小川一枝　絵:佐藤忠良

「騎士と水の精」より

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

家の光協会

世界の民話〈6〉

ドイツ編

赤ひげとぶどう酒商人ほか

1978年9月3日　第1版発行

著者／小川一枝

発行者／高橋芳郎

発行所／社団法人　家の光協会

（〒162）　東京都新宿区市谷船河原町11
電話 東京(260)3151／振替 東京 5-4724

印刷・製本／図書印刷株式会社

分類番号 908　　赤ひげとぶどう酒商人ほか　小川一枝・文

社団法人 家の光協会　1978　208p　22cm　（世界の民話　6）

©Kazue Ogawa,　Cyūryō Satō　1978　Printed in Japan

8397—55024—0301

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

＊みなさんへ＊

民話は、昔の人たちが、みんなでつくったお話です。そこには昔の人たちのすばらしい生活の知恵や夢が、ふんだんに描かれています。

これらのお話を読むと、日本であろうと外国であろうと、国によって風土や習慣がちがっていても、人間の気持ちというのは、どこの国でも同じだと気がつくでしょう。

この本は、ドイツの民話を集めたものです。深い森の中でかつやくする魔女や小人、愉快なぼうけん者などの出てくるドイツ民話は、きっとしばらくの間、みなさんの心をふしぎな夢と空想の世界にさそってくれるでしょう。

もくじ

兄と妹 …… 6
ハンスとかえるのお嫁さん …… 24
親指小僧のぼうけん …… 32
死に神とその名づけ子 …… 46
六人の男の世界旅行 …… 56
百ぴきの羊 …… 72
三人の外科医 …… 80
魔法使いと弟子 …… 90
王女とバイオリンひき …… 100

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伯爵夫人と森の小人――110
魔法のたま――122
かじ屋と悪魔――132
騎士と水の精――146
赤ひげとぶどう酒商人――160
ハメルンの笛ふき――172
〈解説〉先生、お父さん、お母さんへ
ゲルマン民族共通の文化遺産――194

表紙絵・扉・口絵・さし絵＝佐藤忠良

著者／小川一枝

1935年，広島県生まれ。東京大学大学院修士課程修了。ドイツ文学専攻。1971年～74年，オーストリア政府奨学生として，ウィーン大学に留学。現在，武蔵野音楽大学ドイツ語講師。訳書「ティムとふしぎな小人たち」（評論社），著書として，19世紀ドイツ文学の分野における論文多数。

画家／佐藤忠良

1912年，宮城県生まれ。東京美術学校（現・東京芸術大学）彫刻科卒業。彫刻家。新制作協会会員。彫刻により高村光太郎賞，中原悌二郎賞，芸術選奨，毎日芸術賞等を受賞。代表作に「群馬の人」「帽子・夏」（近代美術館所蔵）がある。絵本「おおきなかぶ」「ゆきむすめ」（福音館）など出版物多数。

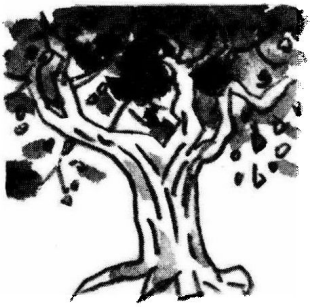
編集協力／西本鶏介

奈良県生まれ。国学院大学卒業。児童文学の評論家として活躍。民俗学にも造詣が深い。主な評論集『空想と真実の国』，民話集『日本昔話集』，『日本伝説集』（以上芸術生活社）他。

装丁／舟橋菊男

世界の民話⑥　ドイツ編

赤ひげとぶどう酒商人ほか

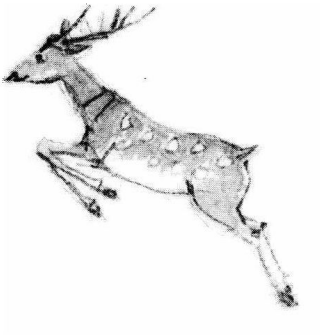


兄と妹

兄が妹の手をとっていった。

「母さんが亡くなってから、少しも楽しい日がないね。新しい母さんは、毎日ぼくたちをたたいたり、近くによれば足でおしのけたりするし、食べ物といえば、残り物の固いパンの皮しかくれやしない。テーブルの下にいる犬だって、これよりはましだよ。だって母さんは、時にはいいものを投げてやってるもの。亡くなった母さんがこれを知ったら、きっと悲しむだろうね。さあ、二人で広い世間へ出ていこうよ。」

兄と妹は一日じゅう、野をこえ、山をこえ、石のごろごろしている道を歩いていった。



とちゅう、にわかに雨が降ってきたとき、妹はいった。
「神さまがわたしたちのために泣いてらっしゃるのよ。」
朝から、固いパンを少しかじっただけで、何も飲まずに一心に歩いてばかりいた二人は、その雨水を手のひらにうけてすすり、また元気をだして歩きつづけた。夕方になって、やっと大きな森にさしかかった。足には大きなまめができ、おなかはぺこぺこだった。ちょうど目の前に大きな木のほらがあったので、そこに腰をおろすと、もうひと足も動く元気がなく、そのまま眠りこんでしまった。
翌朝、太陽が空高くのぼり、木のほらの中にも暑い日ざしがさしこんで、二人はやっと目をさました。すると兄がいった。
「ぼく、のどがかわいたよ。小さな泉があれば行って飲みたいな。チョロチョロ水音がしてるみたいだね。」
兄は立ち上がって妹の手をひき、泉をさがしに出かけた。
ところで、意地悪なまま母というのは、魔女だった。まま母は、二人の子どもがにげ

出したのに気づくと、そっとあとをつけ、森の中の泉にみな魔法をかけておいた。
二人はまもなく、小川を見つけた。水が石の上をきらきら光りながら、白くはねて流れている。兄はすぐさま、しゃがんで飲もうとした。と、妹はそのとき、小川がさらさら流れながら、うたっているのを聞きつけた。

「わたしを飲むと、虎になるぞ、
わたしを飲むと、虎になるぞ。」

妹は思わず、手をうちあわせてさけんだ。

「兄さん、おねがいだから飲まないで！　でないとあなたは虎になって、わたしを引きさいてしまうわ。」

兄はひどくのどがかわいていたが、妹のことばにびっくりし、飲むのをがまんした。
二番めの泉にやってきたとき、妹はまたもや、

「わたしを飲むと、狼になるぞ、
わたしを飲むと、狼になるぞ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、水がさらさらささやいているのを聞きつけた。妹はあわてて、兄の服のすそを引きもどしていった。

「兄さん、おねがいだから飲まないで！　でないとあなたは狼になって、わたしをひとのみにしてしまうわ。」

兄はこんども飲むのをがまんしていった。

「じゃ、この次まで待とう。だけど、こんどこそ、どんなに止めたってだめだよ。もうのどがはりつきそうなんだから。」

三番めの泉にやってきたとき、妹はまたも泉が、

「わたしを飲むと、鹿になるぞ、
　わたしを飲むと、鹿になるぞ。」

と、ささやいているのを聞きつけた。

「ああ、兄さん、後生だから飲まないで！　でないとあなたは鹿になって、わたしのそばからとんでいってしまうわ。」

妹は必死になって兄にすがりついた。が、兄のほうは目がくらみそうなほど、のどがかわいていたので、妹の手をはらいのけ、むちゅうで泉の水に口をつけてしまった。と、最初のひとしずくが、のどを通るか通らないうちに、兄の姿はたちまち一頭の子鹿に変わってしまった。

妹は、魔法にかかった兄がかわいそうで泣いた。子鹿もまた、妹のかたわらにしょんぼりうずくまって泣いた。でも、妹はやっと気をとりなおすと涙をふき、鹿の背をやさしくさすりながらいった。

「泣かないのよ。かわいい子鹿ちゃん。わたしはけっして、おまえを見すてたりしないわ。」

妹は金のくつしたどめをはずし、それを子鹿の首にまいた。それからあしをつみ、やわらかな一本の手綱をあんで子鹿をつなぐと、森のおくへおくへとはいっていった。

長いあいだ歩いて、妹はやっと小さな一軒の家を見つけた。中をのぞいてみると、空き家だったので、ここに住みつくことにした。鹿のためには、部屋のかたすみに、落ち

葉とこけとでやわらかなねどこを作ってやった。

この日から毎朝、妹は森の中で木や草の根、木の実やいちごを集めて自分の食べ物とし、鹿のためにはやわらかな草を腕いっぱいかかえてきてやった。鹿はそれを妹の手からおいしそうに食べ、おなかがいっぱいになると、妹のまわりでとんだり、はねたり、じゃれ回って遊ぶのだった。

〈ああ、兄さんが人間の姿さえしていたら、どんなにしあわせな毎日だろう。〉

妹はいつもそっとため息をついた。夜になると、

「神さま、きょうもわたしたちをぶじにお守りくださいまして、ありがとうございました。どうか一日も早く兄さんを元どおり人間の姿にしてください。」

と一心にお祈りし、それがすむと子鹿の背にもたれて、ぐっすり眠るのだった。

さて、ある日のこと、この国の王さまが、森の中でさかんな狩りをもよおされることになった。森の中には角笛の音や、犬のほえ声、狩人たちの元気のいいさけび声がこだまして、それを聞いた鹿はもうじっとしていられなくなった。

「ねえ、ぼくを外へ出しておくれよ。もうがまんができないんだ。」
子鹿がいつまでもねだるので、妹はとうとう根負けしていった。
「でも夕方には、きっと帰ってくるのよ。らんぼうな狩人たちがはいってこないように戸をしめておくから、帰ってきたら戸をたたいて、『妹よ、あけておくれ。』と、いってちょうだい。もしそういわなかったら、戸はあけなくってよ。」
子鹿は勇んで外へとび出ていった。森の中のさわやかな空気をすうと体がひとりでにはずんでくるのだった。王さまと狩人たちは、この美しい鹿を見かけると、さっそく追いかけはじめた。しかしなかなか追いつけない。しめた、と思ったとたん、鹿はもうすばやく身をかわし、茂みをとびこえ、一目散ににげてしまっている。
夕方になると、鹿は小屋へ走って帰り、戸をたたいていった。
「妹よ、あけておくれ。」
小さな戸があき、鹿は中へとびこんだ。やわらかな落ち葉のねどこに、思いきり手足をのばすと、きょう一日、風をきって森の中を走り回ったつかれが一度にでて、子鹿は

朝までぐっすり眠った。

翌朝、また狩りがはじまった。角笛の音がひびきわたり、狩人たちのさけび声がこだまする。鹿はまたしてもじっとしていられなくなった。

「ねえ、戸をあけておくれ。どうしても行きたいんだよ。」

妹はしかたなく戸をあけてやり、

「でも夕方にはきっと帰ってきて、きのうと同じようにいうのよ。」

と念をおした。

王さまと狩人たちは、黄金の首輪をしたきのうの鹿を見かけると、また追ってきた。しかし、鹿はとてもすばしこくいつもたくみにすりぬけてしまう。一日じゅう、むちゅうになって追っているうち、夕方になってやっと、ぐるりと遠まきにすることができた。狩人のひとりが、うまく足にかすり傷をおわせたので、鹿はびっこをひきひき、囲みをくぐりぬけてにげていった。狩人は鹿のあとをつけ、小屋のところまで追ってきた。そんなこととは知らない鹿は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com